

APTA2018 参加報告

立教大学大学院現代心理学研究科 宮川 えりか

会議の概要

2018年7月3日から6日まで、フィリピン（マクタン島）のシャングリ・ラ マクタン リゾート & スパ セブで開催された APTA 2018 (24th Asia Pacific Tourism Association Conference; APTA 2018) に参加した。Asia Pacific Tourism Association Conference は、観光やホスピタリティに関連する多彩な研究分野の発展を目的として毎年開催されている国際学会である。本年は、126件の発表論文があり、200名を超える方々が参加した。

開催地となったマクタン島は、フィリピン中部のセブ州にある島であり、セブ・リゾートとして知られているリゾート地である。セブ本島とは、2本の橋で隣接しており、日本からの観光客も多い。また、国際会議の開催場所であるシャングリ・ラ マクタン リゾート & スパ セブ (写真1) は、セブを代表するリゾートホテルの1つであり、プールやスパなど様々な施設が揃っている。ホテルの目の前にあるプライベートビーチは、海洋保護区となっており、マリナクティビティを楽しむ観光客で賑わっていた。

研究発表

私の発表は、学会の初日であった。今回の発表は、Thesis-in-Progress Sessions という大学院生が現在行っている研究について研究計画や分析結果を発表し、先生方からアドバイスやフィードバックを頂くことができるセッション（口頭発表）に採択されたものであった。発表した題目は、

「Does Savoring Travel Experience Affect Personal Development?」であった。これまでの研究において、旅行にはスキル向上や自己成長などの効果があることが示されていたが、どのようにしてそのような効果があるかは十分に検討されてこなかった。本発表では、ポジティブ心理学の拡張-形成理論とセイバリング理論を理論的背景として、旅行が自己成長に及ぼす影響のプロセスモデルについて検討した。過去に行った研究を元に立案した研究計画に対して、観光学の著名な先生方から様々な視点よりフィードバックをいただいた。サンプルサイズやデータの分析についても細かくアドバイスをいただくことができ、非常に有意義な議論を行うことができた。また、このセッションで発表を行ったことで、他の国で研究を行っている大学院生の方々とも知り合うことができ、刺激を受けることができた。



写真1 シャングリ・ラ マクタン
リゾート & スパの様子

所感

本学会では、非常に多岐にわたるテーマで発表が行われた。基調講演では、観光学の領域でトップレベルジャーナルの編集長や研究者の方々が複数名参加されたパネルディスカッションが2回行われた。初日のディスカッションにおいては、大学院生・若手研究者に向けてこれからどのように研究をしていけば良いかという内容であった。これからの研究者は、トップジャーナルに複数本の論文を出版しなければいけないプレッシャーの中で研究を行う必要があり、そのような中で痛い目に遭わないよう研究出版における注意点などが説明された。また、研究者が大学のポストに応募する際に採用側はどのようなポイントを見ているのかなど普段では聞くことのできない話も聞くことができ、研究者としてのキャリアについて考える良い機会となった。

一般発表では、旅行者の幸福感の促進要因の検討に関する研究や観光地イメージと商品の知覚に関する研究などの心理学を基礎とした研究も多くあり、興味深かった。

また最終日に行われた講演では、情報やITが発達する中で研究者はどのようにテクノロジーと共存していくかというテーマであった。これまでの研究は、単一の質問紙調査に基づいて相関関係やモデル分析を行うものが多かったが、そのような研究は近い将来AIやロボットでも代わりに行うことができるようになって予測されている。そのため、今後の研究においては、AIを含むテクノロジーをどのように活用していくかが課題となり、今後の方向性などについて述べられた。これらの基調講演や研究発表の他にも様々な発表があり、今まであまり関わりのなかったマーケティングや経済学からの観点からも自身の研究テーマに関連する知見を学ぶことができた。また、コーヒープレイクや食事会などで多くの研究者の方々と話す機会を持てたことはこれからの研究の励みになった。



写真2 基調講演の様子